

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：21402

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12429

研究課題名（和文）外国人散在地域における外国人看護・介護人材の職場学習と相互行為の研究

研究課題名（英文）A Study of Workplace Learning and Interaction among Foreign Nursing and Caregiving Personnel in Multicultural Settings

研究代表者

嶋 ちはる（Shima, Chiharu）

国際教養大学・専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科・准教授

研究者番号：00707630

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、コロナ禍の影響で、当初予定していた東北地方での看護・介護施設でのフィールドワークが不可能となり、研究デザインを大幅に変更し、収集済のデータの再分析に方針を変えざるを得なくなった。分析の焦点は方言から、職場における接触場面のインターアクションにおける様々なリソースの使用やトランスランゲージングに移ることとなった。老人介護施設における日本人介護福祉士と外国人介護福祉士の実際のインターアクションの分析を通して、彼らの専門的能力に限られた日本語能力の中でどのように発揮されていくのか、そのプロセスを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの看護・介護分野における日本語教育研究は、実際の職場場面におけるやりとりに注目したものは非常に少ない。また、看護・介護分野における外国人材の増加に伴い、地方の施設でも外国人材の姿が見られるようになってきたが、外国人材の日本語力の欠如という視点が主であり、職場におけるコミュニケーションという視点から、接触場面でのインターアクションを捉える試みは限られている。本研究では、外国人看護・介護人材の働く職場でのコミュニケーション支援のために、職場における実際の言語行動や言語学習の過程を分析し、コミュニケーションの様相を明らかにしたことに社会的意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）：The COVID-19 pandemic made it impossible to conduct the originally planned fieldwork at nursing and long-term care facilities in the Tohoku region, necessitating a major change in study design and a shift to reanalysis of previously collected data. The focus of the analysis shifted from dialect usage to the utilization of various communicative resources and translanguaging in workplace interactions. By analyzing actual interactions between Japanese and non-Japanese caregivers in a geriatric care facility, we clarified how professional abilities are demonstrated despite limited Japanese language skills.

研究分野：応用言語学

キーワード：看護・介護人材 職場でのインターアクション 外国人労働者 日本語能力 コミュニケーション マルチモーダル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初は、看護・介護現場における外国人材が確実にその存在感を増していた時期にある。看護分野では、経済連携協定(以下、EPA)による受け入れの他、2005年の規制緩和により、一定の基準を満たせば、外国人看護師にも日本の看護師国家試験の受験が認められるようになり、特に中国などの漢字圏出身者を中心に、試験に合格し日本で看護師として働いている外国人看護師の数が急増していた。一方で、介護分野においても、近年のEPAの介護福祉士候補者の国家試験合格率は50%前後にまで上昇しており、それに伴い国家試験合格後も有資格者として日本で勤務を続けている人も増えつつあった。こういった有資格者として看護・介護業務に従事する外国人の増加に加え、2017年には「介護」の在留資格の開始や外国人技能実習制度における介護職種の追加など制度化の動きもあり、看護・介護現場で働く外国人のさらなる増加が見込まれていた状況であった。

しかし、外国人材の職場でのコミュニケーション能力や日本語力について不安視する声が多くあった。しかしながら、これまでの看護・介護分野における日本語教育研究は、実際の職場場面におけるやりとりに注目したものは非常に少ない。また、看護・介護分野における外国人材の増加に伴い、地方の施設でも外国人材の姿が見られるようになってきたが、現場での日本語教育においても国家試験や専門用語の勉強が優先され、高齢の患者や利用者とのコミュニケーションで日々使用される方言については、外国人材が理解に困難を示しているにもかかわらず取り組みが遅れている状態であった。

2. 研究の目的

上記の課題を鑑み、本研究では、外国人看護・介護人材の職場でのコミュニケーション支援のために、職場における実際の言語行動や言語学習の過程を分析し、コミュニケーションの様相を明らかにすることを当初の目的とした。特に、東北地方という地域性に注目し、(1)職場でのやりとりで使用される方言を外国人材はどのように理解し学習しているのか、(2)職場における情報伝達において使用される語彙や表現、構造の特徴はどのようなものか、という観点から分析を行うことを予定していた。地方においては、高齢の患者や介護施設の利用者は、方言を利用することが多く、外国人介護人材が理解しにくい方言を整理し特徴を把握することは意味があると考えたためである。また、首都圏への人口流出と少子高齢化、それに伴う看護・介護分野での人材確保・受け入れは地方共通の課題であるものの、外国人材養成については、とりわけ東北北部においては、都市圏に比べその対応に大幅に遅れをとっているのが当時の状況であったことも背景にある。

しかしながら、2020年度以降は、新型コロナウイルスの感染拡大防止により、介護施設への部外者の立ち入りが制限され、予定していたフィールドワークを基にしたデータ収集が不可能となった。そのため、収集可能な方法で得られるデータや、すでに収集済みのデータを分析していくことで対応せざるを得ない状況となった。そのため、2020年以降は、すでに収集していたデータについて、本研究の目的に合致させた視点を取り入れながら、視点を変えて分析を進めることとなった。その結果、職場において、外国人材が実際にはどのようなインターアクションを行っているか、インターアクションで用いられる語彙や表現、構造などをはじめ、マルチモーダルなリソースの活用という視点から、分析していくこととしたほか、遠隔でも収録可能なインタビューの方法を用いて、職場におけるコミュニケーションの課題について聞き取りを行うことと

した。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、開始当初は以下の5ステップに従い、研究を進めることを計画していた。

- (1) 東北北部、特に秋田県における看護・介護現場で使用される方言について、日本人看護・介護従事者を対象に、アンケートやインタビューにより方言データを収集し、使用傾向について分析する。収集したデータをもとに、同地方で働く外国人人材に理解を確認し、理解が困難であるものの傾向を探る。
- (2) 東北北部、特に秋田県の施設で働く外国人看護・介護人材の職場場面におけるインターアクションに関するデータ（録画データ、インタビュー、フィールドノート）を収集する。
- (3)(2)で収集したデータをもとに、現場で使用される方言を始めとした日本語について、外国人人材の理解や学習プロセスに注目し質的に分析する。
- (4)(2)で収集したデータをもとに、職員間での情報伝達で用いられる語彙や表現、情報のやりとりの構造の特徴を明らかにする。
- (5)上記(1)~(4)の分析結果を基に、看護・介護現場における学習支援教材の開発を行う。

しかしながら、前述の理由により、実際に収集ができたデータは、以下の2点のみであった。

- (1) 日本人看護・介護従事者を対象に行った方言に関するアンケート調査
 - (2) 遠隔で収録できた、日本人介護従事者・外国人介護従事者へのインタビュー
- その他には、過去に収録していた看護・介護現場でのインターアクションの録画をデータとした。

4. 研究成果

本研究は、当初データ収集を予定していた施設で働いていた外国人介護人材が急遽帰国するという予想外のケースが生じた。また、2020年以降は新型コロナウイルスの影響により、予定していた介護施設でのフィールドワークが行えなくなるという事態となり、研究デザインを当初予定よりも大幅に変更せざるを得なかった。

しかしながら、その困難な状況の中でも、主に以下について研究成果を出すことができた。

- (1) 外国人看護・介護人材が働く施設において、日本人看護・介護実習者を対象にした介護現場における方言使用
- (2) 東北地方で外国人介護職員として就労するために必要な日本語学習ニーズ
- (3) 外国人看護・介護人材の職場におけるインターアクションの特徴

まず、(1)については、看護・介護現場で使用されるオノマトペや方言について、アンケートの結果から使用頻度の高いものを抽出することができた。特にオノマトペについては、「チクチク」や「シクシク」など、痛みに関するもの、「もぐもぐ」や「ごっくん」など、患者や利用者の行動を促すものについて、よく使用される傾向が明らかとなり、今後の外国人職員の日本語教育に生かすことができると思われる。

(2)については、現在東北地域の介護施設で介護職員として就労している外国人職員およびその外国人職員とともに働く日本人職員に対し、職場でのインターアクションやコミュニケーション上で感じる課題についてのインタビューを行った。その結果から、仕事上で必要となる日本語力として、音と表記の一致に課題があり、口頭では正しく認識している患者や利用者の名前が介護記録では正しく記載されないこと、褥瘡や床ずれといった専門用語と日常用語がインター

アクション時に混在しており、どの場面でどの語を使うのかという認識が十分ではないことなどが指摘された。また、仕事の分野だけではなく、私生活の中で、他者と交流したり文化的活動に参加したりできるための日本語を学びたいという外国人職員の考えも明らかとなった。また、過去に収録したインタビューについて、職場の国際移動に伴い、それぞれの職場環境の違いとそれぞれの職場で求められる言語使用に着目し、縦断的に言語使用とアイデンティティの変化を分析した。これらのインタビューで得られた結果は、地域日本語教育人材の養成講座で用いられる動画教材として整理、開発され、現在、教育資料として使用されている。

(3)については、方言という視点に加え、translanguaging という概念を用いて、日本語以外の言語リソースを活用して行われているコミュニケーションに着目し、その特徴について分析を進めることができた。これらの結果は、職場では日本語だけでコミュニケーションをとるように指導されていることの多い介護の現場に一石を投じるものであり、今後職員の文化的言語的背景が多様化する職場において、より安全に情報共有を行うためのコミュニケーションの在り方を考えるためのリソースとなるのではないかとと思われる。

様々な要因により、当初の計画とは変更となったことも多かったが、その状況の中でも、外国人が働く職場におけるインターアクションの特徴を把握するという目的に沿い、一定の研究成果は出せたのではないかとと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 嶋ちはる	4. 巻 24
2. 論文標題 看護助手として働く外国人職員の就労場面における言語使用 病棟での業務遂行のためのトランスリンガルなやりとりを例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	6. 最初と最後の頁 48-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋葉丈志・嶋ちはる・平田友香・玉井寛	4. 巻 14
2. 論文標題 秋田県における外国人介護人材受け入れの展望と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junko Mori and Chiharu Shima	4. 巻 24
2. 論文標題 Text, talk, and body in shift handover interaction: Language and multimodal repertoires for geriatric care work	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Sociolinguistics	6. 最初と最後の頁 593-612
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/josl.12434	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 嶋ちはる・平田友香・秋葉丈志	4. 巻 11
2. 論文標題 外国人介護人材受け入れの枠組みと北東北における受け入れ事例：4つの枠組みと外国人材に求められる日本語力とは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 73-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junko Mori and Chiharu Shima	4. 巻 aop
2. 論文標題 Person reference and recognition in shift handovers: An analysis of interactions between Japanese and international care workers	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Multilingua	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/multi-2019-0091	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Junko Mori and Chiharu Shima
2. 発表標題 Text, talk and embodied practices: "Unpacking" handover notes for international workers at a Japanese healthcare facility
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Mori and Chiharu Shima
2. 発表標題 Intersubjectivity and progressivity in person reference and recognition: An analysis of handovers between Japanese and international care workers
3. 学会等名 American Association for Applied Linguistics (AAAL) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Chiharu Shima	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 382
3. 書名 'Conflicting and shifting professional identities of two Indonesian nurses: L2 Japanese socialization at workplaces in Japan and after their return to Indonesia' In Melick, M., Kubota, R., & Lawrence, L (eds.) Discourses of Identity: Language Learning, Teaching, and Reclamation Perspectives in Japan	

1. 著者名 嶋ちはる	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 258
3. 書名 「あんばい、どうですか」金澤裕之・山内博之編『一語から始める小さな日本語学』	

1. 著者名 秋葉丈志・嶋ちはる	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 308
3. 書名 「秋田県における外国人介護労働者の受入れ EPA から技能実習へ」成澤徳子・秋葉丈志・豊田哲也・根岸洋（編）『人口減少・超高齢社会と外国人の包摂 外国人労働者・日本語教育・民俗文化の継承』	

1. 著者名 秋葉丈志・平田友香・嶋ちはる	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 308
3. 書名 「秋田県内の先行事例にみる外国人介護労働者受入れの展望」成澤徳子・秋葉丈志・豊田哲也・根岸洋（編）『人口減少・超高齢社会と外国人の包摂 外国人労働者・日本語教育・民俗文化の継承』	

1. 著者名 秋葉丈志・嶋ちはる・平田友香	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 308
3. 書名 「外国人介護労働者受入れに関する秋田県内の施設の意識調査」成澤徳子・秋葉丈志・豊田哲也・根岸洋（編）『人口減少・超高齢社会と外国人の包摂 外国人労働者・日本語教育・民俗文化の継承』	

1. 著者名 嶋ちはる・平田友香・宮淑・古田梨乃	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 308
3. 書名 「秋田県における外国人労働者受入れと地域日本語教育 日本語教育の機会の確保と質の向上という視点から」成澤徳子・秋葉丈志・豊田哲也・根岸洋（編）『人口減少・超高齢社会と外国人の包摂 外国人労働者・日本語教育・民俗文化の継承』	

1. 著者名 嶋ちはる	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 語から始まる教材作り	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森 純子 (Mori Junko)	ウィスコンシン大学マディソン校	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of Wisconsin-Madison		